

水と緑の



みず・みどい
みまもり
森があき

森づくり

春号

2006.3
Vol.4

季刊誌の愛称決定
「み～も通信」

Spring
Came!

第1期の

森づくりプロデューサー 19名に委嘱状交付

昨年の12月17、18日の第1回目の研修に続いて、2月11、12日に“森づくりプロデューサー養成研修”が行われました。人と人を結びつける役割を持つプロデューサーとして、コミュニケーションの実践や、森づくり活動の企画書づくり、相互評価によるチェック、“ふりかえり”を学びました。

平成17年度は19名の第1期森づくりプロデューサーが委嘱され、各地域で森づくりや森林資源の活用実践のリーダーとして活動していきます。



委嘱状交付



ユーモア満点の講義
（財）キープ協会 川嶋直（ただし）常務理事



熱心なディスカッション風景

森づくりプロデューサーの皆さん

野田 真幹(安来市)	吉川 英雄(飯南町)	原 通康(出雲市)	山本 英子(出雲市)	藤田 昭二(江津市)
犬山 良(松江市)	八幡誠一郎(飯南町)	原 誠道(出雲市)	小笠原哲朗(大田市)	永田 康寛(益田市)
中村 正志(松江市)	横田 和男(奥出雲町)	正木 勉(出雲市)	南原 博文(邑南町)	渡邊 治平(益田市)
福代 美保(松江市)	坂本 英希(出雲市)	水師 達也(出雲市)	三浦 大輔(浜田市)	

H18年度 「水と緑の森づくり税」の使いみち

1 目的

広く県民が享受している森林の公益的機能が失われつつある荒廃林を再生し、水を育む緑豊かな森を次の世代に引き継ぐための取り組みを一層推進します。

2 予算

H18年度事業費 186,848千円
(対前年比145%：H17年度128,748千円)

3 事業の内容

1. 県民参加の森づくり

森づくり・資源活用実践事業／予算額 40,000千円 (H17年度：40,000千円)

県民の自主的な森づくり活動を推進するため、メニューに沿って県民自らが企画・立案した取り組みを支援します。また、県民からの具体的な取り組み事業の採択は、県民10名からなる「水と緑の森づくり会議」の意見を聞き決定します。

取り組みのイメージ

メニュー	申請事業イメージ
森づくりボランティア	どんぐり拾いと苗木づくり、本格的な森林作業、企業による森づくりボランティア など
森づくり講座	学校単位での森林教室、職場・地域単位での森づくり教室 など
木材・森林バイオマス利用による街づくり	木で公共施設や商店街を県民が集う場所に改装、沿道に木製ベンチ設置、学校や公民館でのバイオストーブ利用、新規チップボイラー導入時の実証運転用木材チップの購入、荒廃竹林の竹材利用 など
木の利用講座	間伐材を使った日曜大工、児童クラブでの巣箱づくり など
森林・都市交流	森林ツーリズムの試行、山村と都市の交流の仕組みづくり など



詳しくは、県庁林業課水と緑の森づくりスタッフ、隠岐支庁農林局、各農林振興センター、各地域事務所及び各流域林業活性化センターへお問い合わせください。

森づくり推進事業／予算額 10,748千円 (H17年度：14,548千円)

①森づくり情報交流等

- 水と緑の森づくり会議の開催／4月、7月、10月、1月(年4回開催予定)
- 季刊誌等による情報交流
- 東部イベント／4月29日(みどりの日)「森の誕生日」
(松江市宍道町 県立ふるさと森林公園)
- 西部イベント／12月予定
- 隠岐支庁・各農林振興センター開催イベント／10月～11月予定

②森づくりプロデューサー

養成及び派遣

- 新規森づくりプロデューサー養成研修の実施
- 森づくりプロデューサーの派遣、活動支援

2. 緑豊かな森への再生

県民再生の森事業／予算額 136,100千円 (H17年度：74,200千円)

荒廃森林の水を育む緑豊かな森への再生

- 計画面積：780ha（H17年度：410ha）
- 対象林：重要な水源地域内で10年以上間伐未実施で荒廃している41年生以上の人工林
- 協定の締結：森林所有者と県
- 内容：森林所有者による不要木の伐採と必要箇所への広葉樹植栽
- 条件：10年間の伐採制限、一定条件でのボランティア団体等の作業の受け入れ

県民再生の森事業の流れ

再生林候補選定

- H 18年度計画案
- 候補林所有者調査



H18年度実施予定地選定

- 候補林所有者への説明会
- 候補者の意思確認
- 現地調査等

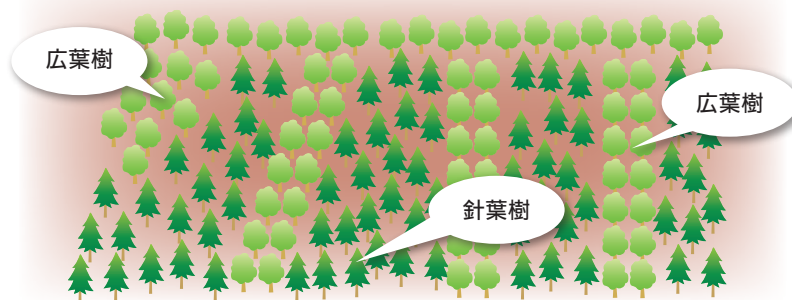


- 協定締結
- 事業開始



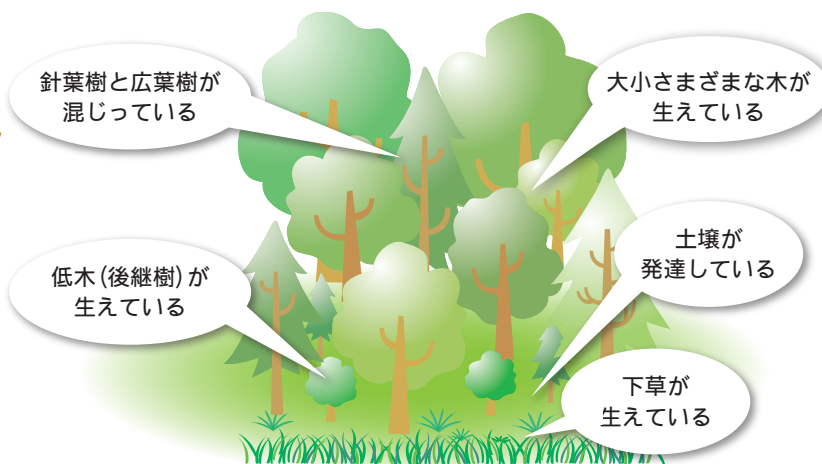
具体的な作業方法例

列状又は群状に伐採し、伐採跡に広葉樹を植栽



将来イメージ

水を育む機能が高い森林



4 事業のしくみ

新 税

500円 (法人:県民税均等割の5%)

水と緑の
森づくり基金
(単独)

県の各部署

アイディア・事業の提案

目

- 基本的な事業の組立て
県民からアイデアの公募
- 全体案を作成

予算案

県議会

審議
議決

県民

県民の参加

水と緑の森づくり会議

- 県民からのアイディア・提案
事業についての意見交換など

事業の実施

森づくり・資源活用実践事業の取り組み

県民の皆さんのアイデアと参加による、森づくり・資源活用実践事業の第3次募集分の事業が決定しましたのでお知らせします。

平成17年度第3次決定事業14件

分野	取組の名称	事業概要	実施団体
森づくりボランティア	森を明るく！ 里山再生事業	荒廃森林で間伐・枝打ちなどの保育作業を実施し、森林の公益的機能の増進を図る。併せて島根大学学生（隠岐の助っ人）など森林ボランティアの受入体制を整備する。	里山を愛する会
森づくりボランティア	「自然学習の森」の整備 事業	田和山遺跡「自然学習の森」ゾーンを児童、生徒及び市民が自然に親しみ、遊び、学べる場になるよう、竹林の整備や、観察路の整備、広葉樹の植栽、児童生徒の森林学習支援など、定期的に継続して実践する。	里山を育てる会
森づくりボランティア	森で海を救おう植林事業	沿岸漁業の低迷が依然として続いているなか、全国的な活動として、植林による山から海への環境保全が活発になってきており、益田市においても講演会などにより知識を深めるとともに、漁業者と林業関係者、児童生徒が共同で植林活動に取り組むことで、環境保全に対する意識を高める。	益田市沿岸漁業 水産振興協議会
森づくり講座	森林ボランティアのための 山仕事講座	公募による参加者に、レベルに応じて森林を手入れする技術（間伐、枝打ち、作業道づくり、用具メンテ、クラフトづくりなど）を習得してもらい、森林ボランティアとして活動する人を養成し、森林ボランティアを行う集団を組織する。	NPO法人 もりふれ倶楽部
森づくり講座	星降る森での県民交流	近年、環境への関心の高まりから、都市住民の森林に対する関心は高まりつつある、しかしながら、都市住民が直接接することのできる森林は極めて少ない。そこで、森林・林業体験ができるフィールドを提供し、講座（森林整備・キノコづくり、薪炭づくりなど）により森林の持つ公益的機能森林整備・管理の必要性を認識してもらい、併せて森林の恵みを利用した交流を継続的に実施する。	別所生産森林組合
木材利用	「地域の自然ふれあい交 流スペース」づくり事業	学校開放により1,400人を超える地域住民が来校する中、共有空間を県産材を利用した「ふれあい広場」として整備し、地域交流活動の拠点となる住民交流空間と、児童による環境学習や情報発信の拠点となる課外環境学習空間を創出する。	馬木教育振興会
木材利用	間伐材丸太を利用した花 壇づくり	県産間伐材の利用促進を図るとともに、将来を担う子どもたちに、緑や土、木材などとのふれあいの場を提供し、森づくりや、森林資源の活用の大切さを伝えながら、広く自然環境を考える、憩いの場づくりに挑戦する。	大原林業研究グ ループ
木材利用	海山交流事業	「海は森の恋人」と言われるように、森林の持つ公益的機能を高度に発揮できる環境を整備し、豊かな水を海に供給し、漁場環境の保全が出来るように、漁業者や一般市民などによる市民（漁民）参加の森づくり意識の高揚を図る。	海山交流実行委員 会
木材利用	いこい・くつろぎ空間づ くり事業	益田市の水源を有する益田地区の住民の参加を得て、商店街の空き店舗を利用し、さまざまなイベント（森づくり・木の匠教室など）を実施し、施設が県産材を利用した市民のいこいの空間となるよう、手作りの木製品を設置する。また、地区内に点在する公共用地や商店前の空きスペースを利用し、お年寄りや観光客のくつろぎスペースとなるよう、木製の安心ベンチを設置する。	益田商店会
木の利用講座	小学生による鳥の巣箱づ くり	小学生が、県産材で鳥の巣箱を作り、木に親しむとともに、野鳥の生態や森林の大切さについて学び、森林に対する関心を深める。	しまねフォレスト ネットワーク奥出 雲
木材利用 森林バイオマス利用 木材森林バイオマス アイデア実証	木材を生活に生かす高齢 者活動	当地区は101戸の集落で、過疎高齢化の進行する中、高齢者の社会的役割を再認識し、長年蓄積した技術と地域資源を利用して中高齢者が地域活性化活動を展開している。今回、炭焼活動のさらなる発展を図るため、木竹酢加工（精製）したバイオマスの農業利用や、木材の端材、間伐材などを利用した製品加工を開発研究し、森の恵みである木材を生活の中に生かしながら森づくりへの理解を深める。	古市地区 振興協議会 ぎばまクラブ
木材森林バイオマス 活用アイデア実証	竹資源の農業利用による 竹林整備の取り組み	里山環境の崩壊を招く一因となっている竹林の整備と竹材の農業利用を結びつけることによる竹林の継続した管理の可能性を探るため、竹の利用にあたっての鍵となる植栽機（チップ粉砕・膨潤機）を導入し、農業者等と検討しながら、中山間地域研究センターとも連携し、農業利用への実証試験を行い、採算性や効果について科学的に分析を行い、竹資源の農業利用による竹林整備の普及促進を図る。	斐伊川流域林業活 性化センター
木材森林バイオマス 活用アイデア実証	道路植樹帯等に竹炭を敷設 した場合の活用実証試験	放置竹林対策として、ボランティアによる竹林伐採や竹炭生産講習を実施しながら、竹炭を市町村道等の植栽帯に施設して、雑草の繁殖の抑制・土壌乾燥防止・樹木の生育状況等の効果試験を実施し、1～2年後に実用化を図る。	松江八束森林組合
森林バイオス利用	石釜で焼く山菜ピザ	本事業1次分で取り組んでいる「おおだ里山林整備」で生じる林地残材（枯木、枯竹など）および、放棄薪炭林をバイオマスとして有効活用するため、薪を使う石釜を築き、その釜で山菜ピザを焼き、楽しみながら活かせる里山の資源を、多くの人々とともに分かち合う。	NPO法人 緑と水の連絡会議

平成17年度は42件(39団体)の県民提案が実践され、約4,500人の皆さんが「森づくり」に取り組みました。



森林ボランティアの
ための山仕事講座
主催：NPO法人もりふれ倶楽部



1年間を振り返ってみました

4名の公募委員の皆さんに、この1年の感想と今後の課題を伺ってみました。



1年間森づくり会議に参加させていただき、私自身いろいろと考えさせられ、また勉強させてもらいました。森林保護活動に取り組んだことがない人々にとって、「森づくり」というテーマはスケールが大きすぎて、どのような取り組みをすればよいのか、どれほどの効果があるのだろうかと考え込んでしまいがちです。

1年を終えて、いかに森づくりに関心を持ってもらい、参加してもらうかというのが今後の大きな課題であると感じました。島根の森林を取り巻く現状を知ってもらい、森に触れ、森との距離を縮めることが森づくりの大切な第一歩となってくるのではないかと思います。そのためには、先駆的グループの取り組みを広く知らせ、その事業を各地域で取り組んでもらう事業展開や、各地域に気軽に親しめる森を確保し、みんなで楽しみながらも管理に挑戦するなど、地道で継続的な取り組みが必要ではないかと思いました。



磯谷 奈緒子 委員

昨年の4月から「水と緑の森づくり税」が新設され、水と緑の森づくり会議の委員募集がなされたとき、私は望んで応募をしました。それは、この新税を導入された理由が、水を育む緑豊かな森づくりとして、森林の公益的機能を保全することが行政の責務と認識されたからです。

また、私の住む斐伊川上流域が、出雲平野地域への生活用水の水源地域であるため、平素から水をきれいにする運動に参加していることなどの経緯もあってのことからです。

従来の森づくりは、主として木材の生産という森林所有者の経済行為でありましたが、地球規模の生活環境の悪化から森林の機能が見直されて、森づくりが環境政策の重要な柱の一つとして、その多面的な機能の保全が必要であると認識され政策の方向が大きく転換されることに至ったと感じております。

「豊かな森づくり」とは何のことだろうと思う人も多いと思いますが、私は健全な森はきれいな空気と水を豊富に放出する機能があって、地球温暖化の原因となる炭酸ガスを吸収して空気を浄化することや、ゴミを伴って降り注いだ雨水を、土や植物を通して浄化し、流出して人間の生活用水に供することの出来る機能を指すものと思います。

そして、森は自然と人間との交流の出来る場であることも大切な要素の一つです。

私は、また木材の生活への貢献、古来の木の文化を忘れてはならないと思います。「木造建築は千年の風雪に耐える」これは宮大工の言葉です。

日本の風土に根ざした木造建築のよさ、木の器や道具の風あいや暖かさが暮らしの中に生かされる豊かさをあらためて見直し、この制度の意義を理解したいものです。



小早川 貞利 委員

現在島根県が取組中の「水と緑の森づくり」事業で、多くのアイデアや提案があり、県民の意識も少しずつ「森の再生」と「水を守る」ことが生きていくうえで必要不可欠であるとわかりはじめたのではないのでしょうか。しかし、まだ多くの方は無関心な状態だと思われます。そのような皆さんに森と水のことを考える一歩を踏み出していただきたいと思います。何をしたら良いのか、今まで多くの人々が考えられたことでしよう。森の楽しさ、収益性、動植物の美しさ、獣と人の関係、山や川の恵みなど、今までとは違う切り口で考えられないでしょうか。提案を否定するのではなく、アクションを興し、良いところは進めて、失敗点は改良してまた提案を繰り返す。一つのサイクルは長いかもしれませんが、提案を砂に埋めず生かしてはと思っています。

「水と緑の森づくり会議」は回を重ねるたびに内容が進化し驚きました。そして、参加者や主催者の方々の森を愛する心と、美しい水と緑の島根県への思いは素晴らしいと感じています。

今後は機会がありましたら、森を無くし森を再生した先進地ドイツの「黒い森」などに学んだらいかがでしょうか。肌で感じるものが多くありました。森に学び、森と人との共存に体当たりしていきたいと思います。



三上 憲昭 委員



和田 譲二 委員

水と緑の森づくり会議に応募したのは、日々山で働く現業労働者であることと、NPOの活動で里山の景観保全に取り組んでいたからでした。

当会議における1年間は、とっかかりが遅かったため、あっという間に過ぎてしまったという感じです。NPOの立場で森づくり事業を提案し、自分が審査員に加わるというのも妙な気がしましたが、提案と審査の両方の視点が経験できたのは収穫でした。次年度以降も積極的に事業を企画・申請し、本制度を活用していきたいと考えています。

毎日のようにチェーンソーを使って仕事をしている立場で、島根の山の奥深さを実感しています。どうしてこんなところに！と驚くような奥地に炭窯の跡がたくさんあり、先人たちが山を“なりわい”にしていたころの息吹きに触れることができます。山菜やフサビやタケノコ、キノコ・・・「林業」という言葉が生まれる以前の直接的な山の幸を得る暮らしが新鮮な魅力となって再登場する。そのきっかけを地域で生み出していこうと思います。

